

## 調査研究プロジェクト実績報告書【A 基幹研究】

1. 研究種別：A 基幹研究
2. 研究期間：2021 年 4 月～2024 年 3 月
3. 課題番号：2021A02
4. 研究テーマ名：【研究 I -2-B】『受け継がれるアイヌの儀礼と芸能に関する研究』
5. 調査研究課題名：「芸能の持続的な継承と発展に関する研究：保存会の実態調査と担い手の人材育成」
6. 研究代表者（氏名、職名）：押野朱美（民族共生象徴空間運営本部文化振興部伝承課 課長補佐）  
谷地田未緒（国立アイヌ民族博物館 研究員）
7. 研究メンバー（氏名、所属機関、職名）：  
野本正博（民族共生象徴空間運営本部 副本部長）  
山道ヒビキ（民族共生象徴空間運営本部芸能課 課長補佐）
8. 研究協力者（氏名、所属機関、職名）：  
甲地利恵（北海道博物館）  
\*肩書は報告書提出当時のもの
9. 交付決定額  
令和 3 年度： 337,817 円  
令和 4 年度： 84,080 円  
令和 5 年度： 873,760 円

## 研究成果の概要（200 字）

本研究は、「アイヌ民族の芸能を持続的に継承するにはどうしたらよいか」「芸能の『変容』や『舞台化』が避けられない状況で、芸能の将来的な保持・発展についてどのように考えるか」という二つの問いについて、実演者や保存会会員など、継承の担い手と共に検討した。ウポポイという組織の体制を活かし、博物館機能（展示・研究・保管）と公園の伝承・公開機能（実演・継承・養成）の連携を図りながら実施した。論文執筆等のほか、3 年間の研究の成果を報告書にまとめて出版した。

## 研究成果の学術的意義・社会的意義（200 字）

本研究の最も顕著な学術的・社会的意義は、アイヌの芸能を担う様々な方の声を情報としてまとめ、出版したことである。ウポポイが実施したアンケート調査のまとめを通じて発表した保存会の声、独自インタビュー調査による白老の芸能の担い手の声を報告書に掲載するとともに、勉強会や議論を経て考えたことをウポポイで芸能を担う研究メンバー自身も寄稿した。この調査報告書の出版により、芸能の将来を考えるために、継承を支える様々な担い手の声を広く知ってもらうための基盤を作ることができた。

研究分野・専門分野： 芸能、舞台芸術、実演、文化政策

キーワード： アイヌの芸能、保存会、継承者、担い手、ウポポイ、白老、先住民族、舞台芸術

\*調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、アイヌ民族の無形文化のうち、舞踊や口承伝承を含む歌や踊り等、芸能全般を対象とする。アイヌ民族の文化について総合的に扱う当館では、舞踊や工芸技術などの無形文化も研究対象とされており、すでに言語については研究が進められている。しかし、舞踊や音楽を対象とした研究は数が少なく、その多くは個人史・地域史などの一部であることが多い。また芸能に特化した研究の多くは言語学（口承伝承）あるいは音楽学の分野で取り組みされており、言語学的・音楽学的分析や地域差の比較などが行われている一方、社会との接点から文化継承の課題や現状を体系的に検討する研究、文化継承のための実践に関する研究、そして現代における表現方法や舞台の変化についての研究はほとんどない。一方、アイヌ民族以外の日本の芸能について研究は、民族音楽学・舞踊学・芸能（史）学・民俗芸能研究などの分野で取り扱われている。また芸能の実践についても、各地の国立劇場が「重要無形文化財」の伝承者育成事業を実施しているほか、国公立芸術大学で実演を学び学位を取得する機会が提供されている。しかしアイヌの芸能は、こうした「日本の芸能」の研究や実演者育成とは異なる文脈に置かれてきており、研究においても実践者育成においても隔たりがあった。

このような背景をもとに、2020年度に両代表者が共同で、「芸能の継承 — 「アイヌ古式舞踊」の保存継承をめぐる文化政策研究 —」と題した論文を執筆した（『文化政策研究』第14号：2021年）。これは国立アイヌ民族博物館開館記念展「サスイシリ」展のために押野が調査した現代における芸能継承の場（保存会、儀礼の場、ステージ事業）についての内容を軸に、主に文化財としての「アイヌ古式舞踊」の継承の実態を概観したうえで、日本の芸能に関する文化政策と比較しながら、以下の3点を提言した：（1）「舞台化」を免れない現在、伝承者の人材育成については、実演技術の継承のみならず様々な側面から本格的に検討される必要があること、（2）同化政策による急激かつ強制的な環境変化が「文化の変容」をもたらしたが、これは時代の変化による「芸能の変容」とは分けて考える必要があること、また「芸能を発展させる」ことも先住民族の権利であること、（3）アイヌ民族の文化財が「民俗」文化財として分類されていることで、文化財制度と先住民族関連制度の間に非整合性が生まれていること。

本研究プロジェクトは、こうした背景やこの論文執筆を出発として企画された。アイヌ文化を専門とし、実演者・継承者でもある押野と、文化や芸術の実践について研究するアートマネジメント研究を専門とする谷地田の二人の視点から同研究は着想されている。このため本研究は歌や踊りの演目自体や地域差を比較するこれまでの研究とは一線を画し、アートマネジメント研究が用いてきた、研究者と実演者が共同して実社会の課題に直接関わりながら、実践と研究を往還して思考する方法論を主軸としている。文献調査や資料調査だけでなく、実演者・継承者のかかわりや視点を重視しながら、保存会等の実態調査を行うとともに、芸能や舞台芸術全般について学ぶ機会を「連続勉強会」として設けることで、現代における芸能の継承のあり方を総合的に検討することが期待される。

## 2. 研究の目的

本研究は、歌や踊りに注目しつつ、「アイヌ民族の芸能を持続的に継承するにはどうしたらよいか」

\* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

という実務的な問いと、より理念的な「芸能の〈変容〉や〈舞台化〉が避けられない状況で、芸能の将来的な保持・発展についてどのように考えるか」という、現代社会に密接した二つの問いについて、実演者や保存会会員など、継承の担い手と共に検討することを目的とした。

具体的には、まず一つ目の問いについて、アイヌの芸能や文化伝承を担う保存会への聞き取り調査を実施することで、継承が困難になっている（あるいは持続的な継承活動を可能にしている）要因を明らかにしようと考えた。重要無形民俗文化財の保持団体であるアイヌ古式舞踊の保存会は、北海道各地に17（連合保存会を加えると18）団体ある。保存会の中には高齢化や継承者不足により存続の危機にあるところも多く、資料や技能も伝承者と共に失われてしまうことが心配されている。本研究プロジェクトでは、こうした保存会等の現状を調査し、文化財を持続的に継承していくために、何が障壁となり、何が必要とされているかを明らかにする。伝承活動の現状を具体的に把握し、現在の課題や成功例を共有することは、それぞれの保存会や伝承者間での情報共有の機会ともなり、またそうした活動を支援する側（国・自治体の行政や博物館、財団等）にとっては制度設計・改善のための情報源となることが期待される。

二つ目の問いについては、伝統芸能の「舞台化」が進行し、アイヌ古式舞踊の実演・公開に専門的に従事する職業が登場した現在の状況を鑑み、専門職としての舞台芸術がどのように支えられているか、国内外にどのような事例が存在するか等を学ぶため、ゲストを招いて勉強会を実施した。アイヌ民族以外の伝統芸能の継承環境や、海外の先住民による事例などについて勉強会は、そのトピックについて考えを深める場であると同時に、実践者と研究者、伝承者などが集い議論をするための場としての役割も期待された。

これらの研究実践は、ウポポイにおいて実演を担う（伝統）芸能課・伝承課とパートナーシップを組むことで、博物館機能（展示・研究・保管）と劇場的機能（実演・継承/開発・養成）を連携させ、芸能研究における新たなアプローチを探った。このような体制で芸能の研究を実施できる機関は日本国内ではほかになく、実践者と研究者、博物館とホールが連携して研究プロジェクトに取り組むことは、ウポポイの体制を最大限に活用することにもつながると考えた。

### 3. 研究の方法

保存会調査については、感染症の影響で当初予定していた各地へ聞き取り調査のための訪問が実施できなかった。一方ウポポイの事業として、各地の保存会が体験交流ホールの舞台上で舞踊を披露するというプログラムが、感染症のおさまりとともに実施されるようになった。そこで本研究では、調査者が外へ出向く「アウトリーチ」型ではなく、ウポポイに訪れる保存会に話を聞く「インリーチ」型調査として、保存会へのヒアリングへの同席や、事業アンケートの分析を行った。2021年、2022年度にウポポイを訪れた10の保存会がアンケートに寄せた声を分析し、編集したうえで報告書として出版した。その際、ウポポイの舞踊チームに寄せられていた質問に答えるため、舞踊チームによる座談会を企画し、記事として掲載した。こうした総合的な情報収集とともに、地元白老のアイヌ協会と保存会に、フォーカスグループ・インタビューを行った。押野が主導したこのインタビューでは芸能の実践に関する話題だけでなく、芸能を披露するという行為に伴う社会的な状況が浮かび上がっ

てきた。

勉強会については、保存会調査と同様感染症の影響で館外へ出向くことが難しかったため、一年目に集中的に開催した。ゲストのほとんどはオンラインで講演し、参加者は博物館内の会議室に集まって話を聞いた。研究メンバーだけでなく、ウポポイ内で踊りや伝承活動に関わる職員も参加した。内容は谷地田が主導でトピックを提案し、メンバーとともに選択した。1年目は座学を中心に5回実施し、館外での活動が可能になってきた2年目、3年目は実践に近い形やワークショップ形式で実施した。全勉強会の記録は以下。

#### **第1回 アイヌの歌・踊り・楽器に関する記録史・研究史（の超高速で未完のおさらい）**

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター甲地利恵

#### **第2回 国立劇場の公演制作と養成事業について**

国立劇場制作部伝統芸能課（独立行政法人日本芸術文化振興会）石橋幹己さん

#### **第3回 NoismCompany Niigata の概要と公立劇場専属舞踊団としてのとりくみ**

りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館事業企画部 舞踊企画課課長 坂内佳子さん、専属舞踊団 Noism Company Niigata 制作統括上杉晴香さん

#### **第4回 カナダ国立劇場：先住民族シアターについて**

芸術監督 ケビン・ローリング（Kevin Loring）さん、アソシエイト・プロデューサー Sage Nokomis Wright さん、先住民族文化レジデント Mairi Brascoupé さん

#### **第5回 ジャパン・ソサエティの活動と OKI さんの米国招へいについて**

ニューヨークジャパン・ソサエティ芸術監督塩谷陽子さん

#### **第6回 「神謡」のメロディをじっくり聴き取ってみよう**

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター甲地利恵

#### **第7回 お話とワークショップ—踊りを学ぶ、みせる、仕事にする**

振付家、ダンサー、教育者ナヨカ・ブンダ・ヒースさん、アーティスト、音楽家 マユンキキさん、アートトランスレーター田村かのこさん

## **4. 研究成果**

本研究の最終年に、3年分の調査結果をまとめた冊子づくりを実施した。7回分の勉強会のまとめ、2回の聞き取り調査、保存会アンケートのまとめと座談会、そして5名の研究メンバーによる寄稿をまとめた。印刷版だけでなくオンライン版を作成し、すべての記事に英語のサマリーをつけることで研究成果の国内外への発信を意識した。その内容は以下の通りである。

まず保存会のアンケート分析では、保存会が「地元で伝わる伝承の保存」を基盤としていることが改めて明らかになった。またウポポイでの公演という舞台の経験が、活動の再活性化や参加意識の向上につながっているケースがあることが明らかになった。また、ウポポイの舞踊チームとの共演や、保存会同士による共演等、具体的な提言について、次年度以降に実現した事項もあった。高齢化や子育てとの両立の困難さ等の共通の課題も明らかになった。

\* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

白老でのインタビューからは、舞踊の保存はそれ単独で実現できるものではなく、言語、儀式、生活様式とともに復興されていかなければならないことが確認された。また踊りを人前で披露することで、鑑賞者からの偏見や差別的発言にさらされた経験の話や、若い世代が人前でアイヌの踊りに参加するときに、いじめや差別につながらないかと心配してしまう話等からは、踊りをめぐる社会の現状が明らかになった。そうした中でも、地域の先輩たちに教わったことを伝えていきたいという思いや、歌や踊りに携わることの喜びなども数多く語られた。インタビューを編集し出版したことで、こうした担い手の証言を記録することができた。

報告書のために企画されたウポポイ舞踊チームによる座談会では、舞踊専門職として日々公演に従事するチームが演目をどのようにして保存会から受け継いできたか、どのように練習や本番を迎えているかが初めて明らかになった。

連続勉強会では、芸能を職業とすることや、日本の伝統芸能継承の様子との比較、カナダの国立劇場で先住民シアターができた事例、先住民のルーツをもってコンテンポラリーダンスの振付家であるアーティストとの対話等、芸能に限らず広い舞台芸術の世界を学ぶことができた。

報告書のために書き下ろした各メンバーの寄稿からは、ウポポイの芸能プログラムができた経緯や、白老における芸能の記憶など、様々なトピックが議論された。

そのほか、各自で論文発表、寄稿、講義などを行ったほか、複数のメディア報道があった。

## 5. 研究成果の発信

報告書を発行したのち、2025年1月に国際伝統音楽舞踊学会(The International Council for Traditions of Music and Dance (ICTMD))に、押野・谷地田がそれぞれエントリーし、両方の採択を得て参加した。押野は本研究を経て検討した、自身のルーツに関連する芸能の継承について30分の口頭発表をした後、祖母から伝承するカムイユカラを全編実演し、また伝統舞踊のワークショップを実施した。この合計120分のセッションは、学会という西洋的形式による知識の共有方法自体に疑問を投げかけ、先住民族の知識を先住民族らしく共有し、議論するにはどうしたらよいかという考え方から提案したセッションで、歌や踊りを実際に体感した後で、文化継承や音楽について活発な議論が交わされた。谷地田は本研究の報告書をもとに、ウポポイでアイヌの芸能のプロフェッショナル化が起こっていることについて、20分の口頭発表を行った。

この学会発表からの帰国後、白老町で本研究の報告会を以下の通り実施した。報告会では、それぞれ学会発表を経てさらに深めた内容を発表し、ゲストを交えて議論した。

### 「芸能の継承と発展」研究報告会（2025年2月16日）

押野朱美「芸能の『変容』を探る：祖母の教え、ニュージーランドでの発表と研究プロジェクトを通じて」  
谷地田未緒「プロフェッショナル化、舞台化、継承の環境について：2つの研究プロジェクトからの考察」  
土井冬樹（ゲスト・天理大学）「マオリの無形文化の保存に向けて：ニュージーランドとマオリの芸能との関わり」

コメント：野本正博、山道ヒビキ、甲地利恵

\* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

本研究と、その成果としての国際学会の発表について、北海道新聞で報道された（北海道新聞 2025年2月17日「先住民、音楽が紡ぐ絆 ウポポイの押野さん、谷地田さん NZで国際学会参加」）。

## 6. 主な論文発表・成果物等

### 〔雑誌論文〕

- ・ 押野朱美, 秋山里架「鷓川地方のアイヌ文化伝承者、吉村冬子フチの教え」, 『国立アイヌ民族博物館研究紀要』(1), 2022年, p. 56-68, <https://doi.org/10.57545/namjournal.3> (査読あり).
- ・ 谷地田未緒, 「『アイヌ古式舞踊』の文化財指定の経緯に関する考察——知里真志保と本田安次の原稿から——」, 『国立アイヌ民族博物館研究紀要』(1), 2022年, p.114-131, <https://doi.org/10.57545/namjournal.7> (査読あり).
- ・ 谷地田未緒「ウェルビーイング、多文化共生とアイヌ民族——『マジョリティ特権』と『和人フラジリティ』」, 『アートマネジメント研究』(23), 2023年, p51 - 53, 招待寄稿 (査読なし).

### 〔学会発表〕

- ・ Oshino Akemi, 'Lecture Workshop of Ainu Songs/Dances: My Sense of Self through Grandmother's Teachings' (120min), International Council for Traditions of Music and Dance (ICTMD) 2025, Wellington, New Zealand.
- ・ Mio Yachita, 'Navigating a New Phase: The Professionalization of Ainu Performing Arts Post-2020', International Council for Traditions of Music and Dance (ICTMD) 2025, Wellington, New Zealand.
- ・ Mio Yachita, 'Re-framing "Traditional Ainu Dance" within Cultural Policy: Japan's Indigenous Policy and Professionalisation of Performing Arts', 12th International Conference on Cultural Policy Research (ICCPR), 2023 September 21, Antwerp/Online.
- ・ Mio Yachita, 'Comparison of Performer's Training for Japan's Intangible Cultural Heritage: Case of Traditional Ainu Dance and Bunraku Puppet Theatre', The Asia-pacific Network of Cultural Education and Policy (ANCER) 5th Conference, 2023 December 3, Singapore.
- ・ 押野朱美「アイヌ民族の芸能から考える博物館の今後のあり方」, 第69回全国博物館大会分科会発表, 2021年11月 (札幌).
- ・ 谷地田未緒「『アイヌ古式舞踊』の文化財指定の経緯に関する考察——知里真志保と本田安次の原稿から——」, 日本文化政策学会第15回研究大会, 2022年3月 (オンライン).

### 〔図書〕

- ・ 押野朱美・谷地田未緒 編(2024)『創る、伝える、つながる 私たちの芸能』(国立アイヌ民族博物館研究プロジェクト「芸能の持続的な継承と発展に関する研究」(2021A02)活動報告書)国立アイヌ民族博物館芸能研究プロジェクト.
- ・ 押野朱美、秋山里架 (2023)「コラム フチへの想い」国立アイヌ民族博物館・立石信一・佐

\* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

々木史郎・田村将人編『ウアイヌコロ コタン アカラ ウポポイのことばと歴史』、国書刊行会、pp134-137。

〔寄稿・解説〕

- ・ 押野朱美 『アイヌとして、生きる ――祖母の教えと博物館で伝えたいこと―』 国際人権博物館連盟 - アジア太平洋地区 (FIHRM-AP) ウェブマガジン ([https://fihrmaph.nhrm.gov.tw/en-us/?g=essays\\_content&sid=75](https://fihrmaph.nhrm.gov.tw/en-us/?g=essays_content&sid=75)) (2023年8月27日掲載/10か国語掲載)
- ・ 谷地田未緒 (2022) 演劇評「「永遠の矢 トワノアイ」に寄せて 宇梶剛士が描く物語の力」、2022年3月23日北海道新聞夕刊。
- ・ 押野朱美 (2023) 「アイヌ民族の楽器と音楽」浜松市楽器博物館展示解説文 (2024年1月)
- ・ 押野朱美、谷地田未緒 (2022) 「アイヌ民族と音楽」「日本めぐり第7回北海道白老町 国立アイヌ民族博物館」、『bouquet (ブーケ)』No.14、教育芸術社。

〔その他〕

- ・ 「芸能の継承と発展」研究報告会 (2025年2月16日) 登壇：押野朱美、谷地田未緒、土井冬樹 (天理大学/ゲスト)、コメント：野本正博、山道ヒビキ、甲地利恵
- ・ 北海道新聞「先住民族、音楽が紡ぐ絆 ウポポイの押野さん、谷地田さん NZで国際学会参加」(2025年2月17日) (押野朱美・谷地田未緒インタビュー掲載)。
- ・ 押野朱美 (2023) ラジオAir-G「ウポポイラジオ『ウパシクマ』」ゲスト出演 (2023年5月8日放送)
- ・ 北海道新聞「ウポポイ 3周年 コロナ禍から再出発 若手職員 3人、文化発信へ決意新た」(2023年7月17日) (押野朱美インタビュー掲載)
- ・ 谷地田未緒 (2023) 「アイヌ文化について知ることが、なぜ「私たち」にとって大切なのか」、奈良県立大学地域創造学部「ミュージアム論」ゲスト講義 (2023年12月19日)、奈良県立大学地域創造学部 (オンライン)
- ・ Mio Yachita(2023),"Newly Recognized Indigenous People of Japan, Ainu, and its new National Museum", at Mekong Cultural Hub Meeting Point 2024, Hanoi, Vietnam (Space282).
- ・ 押野朱美、「アイヌ民族と文化は過去のものではなく現在進行形」、『STV創立65周年記念 KAKAR ～アイヌ文化を紡ぐ～』、2023年3月30日。 <https://mv.stv.jp/contents/5813?fcid=74>。
- ・ 押野朱美、ゲスト出演、「ウポポイラジオ」、エフエム北海道 (AIR-G)、2023年3月26日。
- ・ マユンキキ、谷地田未緒 (2021年10月)：ゲスト講義、シンガポール南洋工科大学 (NTU) アート・デザイン・メディア学科。
- ・ 押野朱美、谷地田未緒、ゲスト講義「国立アイヌ民族博物館の展示と民族共生象徴空間「ウポポイ」で働くということ」、早稲田大学高等研究所「美術史演習8A」。
- ・ 谷地田未緒 (2021年5月)：ゲスト講義、成蹊大学文学部文化行政コース「大学生に対するアートマネジメント (博物館・企画制作)」。